

私が考える まちづくりの面白さ



倉根 明德

長野県建設部都市・まちづくり課
まちなみ整備係主査

【くらね・あきのり】

1978年長野県生まれ。2003年長野県入庁。現地機関勤務を経て2010年国土交通省出向。2011年博士（工学）。現在は、業務の傍ら、2013年に発足させた信州イノベーション・プロジェクト（SHIP）で多様な人と「まちづくり」を実践中。

ターニングポイント

——お前はこれまでの人生で

脳みそを1グラムも使っていない。

そして、そのことにも気が付いていない

馬鹿野郎だ——

大学4年の春、配属された研究室の指導教官に言われた言葉であり、私の人生を大きく変えた言葉でもあります。就職前の話になります。私が「まちづくり」を語る上で、大学から大学院時代の経験は欠かすことのできないものなのでお付き合いください。

幼少期、橋やトンネル、高層ビルに興味を持ち、「将来は土木技術者になる」と決め、高校は迷うことなく高等専門学校（高専）に進学しました。高専ではその目標に向かって土木工学を学んでいたのですが、「都

市計画」の講義を受けたとき、自分が幼少期から興味を持っていたのは、土木構造物そのものではなく、「まち」だったことに気が付きました。

都市計画に目覚めた私は、卒業研究も都市計画を選択し、大学への編入も都市計画を学べる大学を基準に決め、意気揚々と編入したのですが、そこで待っていたのが冒頭の言葉でした…。

自分で言うのも何ですが、幼少期から成績も良く、目標に向かって真つすぐに生きてきたと思っていた自分には衝撃的な言葉でした。正直、最初は「この人何を言っているのだろう？」と思いましたが、「それが一生懸命勉強してきた学生に対する言葉か！」と怒りも感じました。しかし、この（口は悪いが愛のある）指導教官との出会いが、私の人生を大きく変え、その後、まちづくりに深く関わるようになる「ターニングポイント」となりました。

「考える」ことの面白さ

卒業研究がスタートするとすぐに冒頭の言葉の意味を理解します。私が大学で研究したのは都市計画でしたが、研究そのものよりも徹底的に教育されたのは「考える」ことです。何故そのアプローチなのか、何故その結論になるのか、週1回のゼミでは学生1人に対し1時間から2時間、「この「何故」が繰り返し飛んできます。それまでの人生で何となくうまくやってきた自分にとってはまさに地獄でしたが、「考える」ことをしてこなかったことを痛感したときでもありました。

おかしなもので、最初は地獄だと思っていたゼミの時間も、次第にのめり込んでいき、食事をすることも、寝ることも惜しんで没頭しました。その代償として2度も貧血で倒れたりしましたが（笑）、この人生

で最も濃密だった1年間で私が見つかったことが「考える面白さ」でした。それまでは、物事を何となく考え、何となく決めていましたが、自分は何をしたのか、そのために何をすべきか、徹底的に考えるようになりました。今、公私でまちづくりに関わり、楽しめているのは、この1年間のおかげだと思っています。

現場で学んだ「まちづくり」

考える面白さを知ってしまったことで、もっと学びたいという欲求が日に日に強くなっていき、大学院へ進学することになりましたが、指導教官の勧めもあり、当時最も興味があった歴史的な街並みに関する研究を精力的に行っていた金沢大学大学院の都市計画研究室の門を叩きました。

金沢では、研究活動はもちろんのこと、まちづくりコンサルタントだったM氏（現在は某大学の教授）と出会い、様々なまちづくり活動に携わりました。M氏の口癖は「現場で学べ」。その言葉のとおり、商店街の活性化、温泉街の復興、農家民泊のスタートアップ、蔵を活かしたまちづくりなど、M氏を含む多様な大人たち（大学教授、建築士、行政マン、アーティスト等）や他大学の学生と一緒に、現場でリアルなまちづくりを学びました。

今考えると、15年以上前に産学官が連携したまちづくりを始めていた金沢で学生時

代を過ごせたこと、そして、考える面白さを知った多感な時期に多様な方々と一緒に活動した経験が私の財産であり、まちづくりの面白さを知った原点でもあります。

スキルアップに励んだ 若手時代

学生時代に様々な経験をした中で、「行政としてまちづくりに関わりたい」と考えるようになりました。ダイナミックな都市計画をしたいと思ったことも理由のひとつですが、勘違いも甚だしいことに、最大の理由は「行政に魅力的な人が少ない」ことでした。当時、学生としてまちづくりに関わっていた私は、「行政次第でまちはもっと面白くなる！誰もいないなら俺がその役になってやる！」と行政職員になることを決意しました。

県庁の採用試験で「私が都市計画やまちづくりの分野から長野県を魅力的な場所にします！」と宣言し県庁の職員になりましたが、こんな変な奴を採用した長野県の懐の深さに今でも感謝しています（笑）。

また、学生時代の経験で実感したのは、「何らかの役割を担わなければまちづくりは面白くない」ということです。学生時代は「学生」というだけで様々な役割がありました。社会人としてまちづくりを楽しむには役割を明確にする必要があると考えました。そこで、私は、まちづくりの中でも「都市計画」「土木」「行政」といったア

プローチで役割を担うため、1年目からひたすらスキルアップに励みました。

まず、探したのがまちづくりを実践している団体と都市計画を学べる場所です。1年目から「都市計画をやりたい」と希望を出していましたが、すぐに希望の部署に配属されるとは思っていませんでした。いつその時が来てもいいように準備をしていました。

初任地は松本市内の現地事務所でしたが、見つけたNPO団体も大学の研究室も長野市だったので、毎月2回、仕事が終わった後に1時間かけて長野市まで通いま



大勢の研究者を前に若干緊張／博士論文公聴会

した。なお、この研究室は、1ヶ月に1回、ゼミに社会人を招いて交流しており、勉強だけでなく、様々な社会人とお会いすることもできました。

さらに資格取得にも積極的にチャレンジし、2年目には2級土木施工管理技士、4年目には1級、5年目には技術士補を取得しました。また、職員の技術発表会や各種セミナー等にも積極的に手を挙げていました。6年目に都市計画業務の担当となる内示をいただいたときは、「ついに順番が来たか!」と思ったことを覚えています。

行政こそアカデミックな視点を

6年目、都市計画の中でも当時最も関心のあった土地利用制度に関する業務を担当することになりましたが、幸運だったのは、当時まだ全国で数例しか実績のなかった制度の導入に携われたことです。

他の分野はわかりませんが、都市計画は強い権限を有する制度ですので、行政的な視点に加え、アカデミックな視点が必要だと思っています。しかし、当時の私は、口ではそう言っているものの、知識もスキルも伴っておらず、業務として都市計画に携わるのであれば、さらなるスキルアップが必要だと痛感しました。

目標ができれば、後はそれに向かって突き進むしかありません。そこで、大学院の恩師に社会人として働きながら研究をした

いと相談したところ、二つ返事で快諾していただいたので、7年目の秋に金沢大学大学院の博士課程に入学しました。

当時、長男が生まれたばかりだったので、父親、県庁職員、大学院生という3足のわらじを履くことになり、さらにその半年後、国土交通省への出向を言い渡され、4足(気持ち的には5足くらい)のわらじとなりましたが、どれもやりがいのあるものだったので、やる気に満ち溢れていました。正直、体力的にも精神的にも辛い時期もありましたが、何とか出向を終えて長野県に戻ることができました。

出向後は念願だった都市計画課に配属され、今度は全国初の土地利用制度の導入に携わることになりました。博士論文の総括を国際学会に出すことになり、慣れない英語と前例のない協議に悪戦苦闘の日々が続きましたが、9年目の秋に無事、博士(工学)を取得し、10年目には、技術士(都市及び地方計画)の取得と、全国初の制度導入も果たすことができました。学生時代から学んできた都市計画を実際のまちに導入することの喜びと、責任の重さを実感した瞬間でした。

なかなか難しいとは思いますが、個人的には行政職員もアカデミックな分野に関わっていくことが必要だと感じています。大学等の研究機関と連携することも大切ですが、職員自らがアカデミックなスキルを身に付けることで、研究と現場がよりリアル



ニュージーランド流の教育を体験! / SHIP

多様な人材の交流が「まち」を変える

に繋がり、研究機関にとっても行政にとっても有益になるものと考えています。

県庁入庁から約10年、主に行政からのアプローチでまちづくりに携わってきましたが、博士課程で研究を進める中で、民間の方との交流が増えるにつれて、行政の限界も感じるようになってきました。

そこで、学生時代のように、もっと多様な人と一緒にまちづくりがしたいと考えて

時には知事も参加して意見交換／SHIP



発足させたのが、信州イノベーション・プロジェクト(SHIP)という団体です。「行政」という肩書ではなく、1人の県民、住民として、まちづくりや地域活動について語り、長野県を魅力的な場所にしていくため、できることをやっていこうという活動です。

5人の若手県庁職員でスタートした活動ですが、月1回の交流会を続けるうちに、民間企業やフリーランスで働く方、学生なども参加してくださるようになり、これまでに延べ800人以上の方と交流することができました。また、そこでの繋がりから、

「30歳の成人式」を長野県で初開催したり、各地のイベントのサポートをしたりしながら楽しんでいきます。

これらの活動から、まちづくりは関わる人が多様であれば多様であるほど面白くなると実感しています。現に、全国を見回しても、面白いまちづくりをしている地域には、必ずと言っていいほど、多様な人がまちづくり関わっています。これからのまちづくりは多様な人の面白い活動をどうやって結び付けていくかが問われると思いますし、行政にはそのコーディネーターやディレクション能力が問われるようになってくると思います。

こんなことを言うては何ですが、行政や有識者、コンサルタントがつくる「○○計画(案)」を住民に公開し、意見を求めるといったプロセスのまちづくりは、そろそろ終わりにしなければならないと思っています。

ニュージールランドのまちづくり

——ニュージールランドは

「住民が主役の社会」。

地域のことは地域が考え、行政はそのサポートをしているだけ。クライストチャーチの復興計画を策定した際は、

住民から3ヶ月で10万件の意見が出されました——

冒頭の指導教官の言葉が学生時代に衝撃を受けた言葉だとすれば、社会人になって衝撃を受けた言葉はこれです。クライストチャーチは36万人の都市ですので、人口の4人に1人くらいが、まちの将来に対し意見を出したことになりました。行政でパブリックコメントなどをご担当されたことのある方は信じられないと思いますが、たった3ヶ月で10万件です。これを聞いて居ても立ってもいられずニュージールランドに調査に行きました。

ニュージールランドに10年以上も前に移住して、子育てをしながら日本とニュージールランドの違いについて研究をしているコーディネーターの方と約2週間、日々議論しながら、行政機関や民間企業、教育機関、一般家庭などを対象にヒアリングを実施し「何故10万件の意見が出るのか?」を調査しました。

詳細を書き始めるとキリがないのですが、一言で表現すれば「役割分担が明確」だということです。中でも一番衝撃を受けたのが行政の役割でした。ニュージールランドの行政はあくまで住民のサポート役であり、シンクタンク的な立場です。何事も決めるのは住民であり、主役は住民です。「○計画(案)」も、徹底的に住民の意見を聞くところから始まり、行政は住民が意見を出しやすいしくみを考えます。

さらに、大企業の社長であろうが、小学生であろうが同じひとつの意見として扱い、

いわゆる「付度」^{そんたく}は皆無でした。

クライストチャーチの復興計画策定時には、子供が書いた絵やブロックでつくったまちも貴重な意見としてしっかりと記録され、計画に反映されます。カルチャーショックとはまさにこのことだと思いましたが、私が考える理想のまちづくりがそこにありました。

こう書くと「10万件もの意見をどうやって計画に反映させるのか？」と思う方もいるかもしれませんが。私も同じように思い質問したところ、「デザインのスキルを持った職員が意見を出したくなるようなポスターやロゴをつくり、あらゆるチャンネルを使ってできるだけ多くの意見を集めます。そして集まった意見をアナリストのスキルを持つ職員が質的分析ソフト等を使ってカテゴライズし、プランニングのスキルを持つ職員がそれらを見て形にしていきます」との回答が返ってきました。

私が「日本では計画をつくるセクションが意見を集めることが多いですし、意見を集める前に、行政が（案）をつくることが多いです」と話すと、「それは一番ダメなやり方ですね。そのやり方だと住民の主体性がなくなるし、行政もあまり多くの意見を集めようとは思わない。そして、行政にとって都合のいい意見ばかり計画に落とし込んでしまう。ニュージーランドではそれぞれ別のセクションでやっています。日本は何故そんなやり方をしているのですか？」と逆に質問されてしまいました。

このニュージーランドの計画策定手法は、いわば人から地域、そしてまちへと積み上げていくまちづくりとも言えます。私がSHIPなどの活動を通じて面白いと感じたまちづくりも、まさにこの積み上げ方式です。正直、行政や有識者がつくる教科書的なまちづくりは全く面白くなく、最低限のルールを決めた上で、後はそこに暮らす人が、好きなことをして、好きな場所をつくる、その心地よい空間の集まりが「まち」でなければいけないと、あらためて実感したニュージーランド調査でした。

なお、このまちづくり手法はほんの一例に過ぎず、働き方や子育て、教育など、ニュージーランドは参考にすべきことがたくさんあります。



産官学の方とディスカッション／ニュージーランド

さんある国でしたので、行政職員に限らず、これらの分野に関心のある方は是非一度足を運んでみることをおすすめします。効率よく働き、家族との時間や子供の成長を何よりも優先し、豊かに暮らしている姿にきつと感じるものがあるはず。私も今度は子供を連れて行きたいと思っています。

最後に

「まちづくり」の面白さは、どれだけ主体的に関われるかによって大きく変わってくると思います。すでに様々な地域が始まっていますが、気の合う仲間たちとワイワイ議論しながら、居心地のいい空間をつかっていくまちづくりは本当に面白いものです。逆に、誰かがつくった計画に意見を出さただけだったり、望まない役割を与えられてしまったりするまちづくりは面白いわけがありません。「まち」は特定の人がつくるものではなく、多様な人が多様につくり上げた居心地のいい空間の集まりであるべきだと思います。

私は県庁の採用試験で「私が都市計画やまちづくりの分野から長野県を魅力的な場所にします！」と宣言しましたが、15年経った今でもその気持ちに変わりはありません。これからは都市計画の専門家として、または1人のプレイヤーとして、多様な仲間たちと一緒に、長野県をもっと面白い場所にしていきます。